

第二章

『日本語で英語力を伸ばす法則』

外資系航空会社の英語の試験には、TOEICのような形式の問題、英語の総合力と思考の論理性を確かめる英文エッセイ記述問題、そして英語の発音確認と瞬間的な情報収集能力を試す英字新聞読解などがあります。

よく、「英語ができないのですが、客室乗務員になることができるでしょうか？」と聞かれることがあります。どうしても客室乗務員になりたい真剣な気持ちと英語に対する苦手意識が合わさっての質問であることがわかるので、「大丈夫ですよ。」と言ってあげたい気持ちになりますが、この質問に対しては敢えて「客室乗務員を目指すのであれば、英語の習得は必要、まして外資系を目指すのであれば、絶対条件です。」と答えるようにしています。

身も蓋もない答えのように感じられるかもしれませんが、先輩も同僚も、そしてお客様も外国人というシチュエーションの外資系航空会社で、英語を使わず業務をこなすことはできません。

ただ、ネイティブスピーカーのように流暢な英語が必要、といっているのではありません。流暢であればそれにこしたことはありませんが、必要とされる英語力は、あくまで客室乗務員としての業務をこなせるだけの英語力であり、その見極めを、各航空会社採用試験官は、英語関連の試験や英語による面接を通して行っているのです。

英語は、単に言葉です。日本人が日本語を話せるのは、生活を通じ、単語を覚え、熟語を覚え、時に間違えながら自然に覚えていったからです。

帰国子女やインターナショナルスクールに通っていた人は、小さい頃に日本語同様に英語に接する機会が多く、流暢に英語を操りますが、彼らには日本語用と英語用の2つの思考回路が身についていて、英語を使うときには英語回路が自然に働くという脳のメカニズムによるからだそうですが、英語をあくまで必要に駆られて(多くの場合は

受験科目である、という理由ではないでしょうか)覚え始める大多数の私たちには、この回路を今から身につけることは残念ながら至難の業と言わざるを得ません。

先のインタビューした外資系航空会社の客室乗務員(100名)のうち、帰国子女を除いた方を対象に、「あなたの英語力を伸ばした要因は何ですか？」という質問をしたところ、最も多かったのは、「必要に迫られていたから」「慣れ」という回答でした。

日常生活の中で、テレビを観る時間、音楽を聴く時間のうち、いくらかを『英語を集中して聞く時間』に割いてください。単に英語を聞き流すだけでよいとする考えもあるようですが、EOKは、短い時間でも良いので、毎日、英語を集中して聞くことが大事と考えます。題材には、映画やニュースでもなんでも良いのですが、映画にはスラングも交じっていることが多く、あまり英語に自信のないと思われる方にとっては、ハードルが高いかもしれません。

本屋に行けば、CD付参考書がたくさん並んでいます。その中から、『会話・対話』**形式のもの**を1つ選んで、その内容を集中して聞きとるというやりかたが、ヒヤリング力を伸ばす方法としてお勧めです。

ボキャブラリーの増やし方、これはひたすら覚えていくだけですが、限られた時間で実用的な覚え方は、王道から外れ、主観的な発想かもしれませんが、**形容詞は捨て、名詞と動詞を中心に覚える。特に日常会話で使いそうな単語や熟語のみ。**「形容詞を知らず、文のニュアンスが分からなかった」のほうが、「文章自体が分からなかった」よりは良いのですから。

本当の英語の総合力とは、耳で慣れ、目で単語を追いかけて、ボキャブラリーを増やし、英語での会話の機会を増やす、会話の中から新たな発見をしていく、というサイクルを繰り返す、ことにより身につくものですが、採用試験までにどんな英語の勉強をすればよいのか、と思い悩んでいるかたは、このやりかたで追い込んでください。